九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

社会主義社会の階級斗争中国における新理論の形成

具島, 兼三郎
九州大学法学部教授

https://doi.org/10.15017/1550

出版情報：法政研究. 34 (3), pp.1-16, 1968-01-15. 九州大学法政学会
バージョン：
権利関係：

論説

社会主義社会の階級斗争

―中国における新理論の形成―

具島兼三郎

目次

一、中国に対するソ連理論の影響
二、中国の現実とくいちがうソ連理論
三、中国における新理論の登場
四、埋めがたくなったソ連理論との溝
五、理論的転回点となった中共第八期中央委十中全会

一　中国に対するソ連理論の影響

所有制の社会主義的改造が終って、中国の社会が新民主々義社会から社会主義社会に移行したのは一九五六年末であったが、そのころまで中国では、社会主義社会にも階級や階級斗争があるというようなことを唱えたものは、誰もいなかった。それよりもむしろ、社会主義社会になれば、階級も、階級斗争もなくなるという考えが多くの人たちをとら

えていた。社会主義社会についてなんの経験ももたなかったそのころの中国では、社会主義社会の問題については、ソ連の理論をたよりにして、手探りする以外になかったが、中国がたよりにしていたソ連の理論はソ連の理論で、所有制の社会主義的改造が完了すれば、階級も、階級闘争もなくなると教えていたからである。そのために多くの人々は、このような理論の影響をうけて、社会主義社会では階級も、階級斗争もなくなるものと信じていた。たとえば、中国の経済学者、千家駒、馮和法は、かれらが中華人民共和国憲法の学習用としてかいた書物、「過渡期の中国社会経済制度」のなかで、「中華人民共和国の成立は、新民主主義革命の段階が基本的に終結し、社会主義革命の段階がはじまったことを示すものである」[二]とし、この「中国革命の第二段階」の基本的任務は、「中国に搾取もない、階級もない社会主義社会を樹立する」[三]（傍点　具島）ことであると説いている。すなわち、これによると、著者達が社会主義社会になれば階級がなくなるという期待をもっていたことがわかる。

同じような考えは、中共中央にもあった。たとえば劉少奇が一九五六年九月中央委員会を代表しておこなった中共第八回全国代表大会での政治報告のなかには、次のようにのべられていた―

「生産手段の私有制を社会主義的共有制にかえるというきわめて複雑で困難な歴史的任務は、わが国では、いままでに基本的になしとげられたのであります。わが国における社会主義と資本主義のあいだの、だれがだれに勝つかという問題は、すでに解決されたのであります。[三]」

「社会主義的改造が完成されるまでは、階級斗争はやはりひきつづき存在します。」

すなわち、ここでは、かれが所有制の社会主義的改造によって、社会主義と資本主義との闘争はすでに勝負がついたと信じていたこと、階級闘争が存在するのは社会主義的改造が完了するまでと考えていたことが示されている。しかも、この報告はかれ個人の見解をのべたものではなく、中国共産党の中央委員会を代表しておこなったものであ

ったから、中央委員会としても、そのころまではこのような考えを支持していたことがわかる。

同じような考えは、ソ連社会の評価のなかにもみられた。一九五六年末「人民日報」編集部が、中共中央委員会政治局拡大会議の討議を経てかいたといわれる重要論文、「ふたたび プロレタリアート独裁の歴史的経験について」（「人民日報」一九五六年一二月二六日所載）は、「搾取階級がなくなり、反革命勢力がだいたい粛清されたのち」のプロレタリアート独裁の任務について論じた箇所でスターリンを批判し、「スターリンのように階級がなくなってからも、相変らず階級闘争の尖鋭化を強調し、そのために社会主義的民主主義の健全な発展をさまたげるようなことは、してはならないのである」[五]とかいている。すなわち、これによると、中共中央もまた一九五六年末ごろまでは、「ソ連ではすでに階級がなくなった」と、信じていたとみてよい。

二　中国の現実とくいちがうソ連理論

しかし社会主義社会成立後、中国が経験した反右派闘争や反右翼日和見主義闘争は、「社会主義社会には階級も、階級闘争もない」という理論が、実践と両立しがたいものであることを示した。整風運動に便乗した右派の抬頭とこれに対する反撃、総路線、大躍進、人民公社に対する右翼日和見主義の反対とこれに対する反撃、自然災害を利用した旧地主、新旧ブルジョア分子の策動とこれに対する反撃―これらはすべて資本主義か、社会主義かの闘争であり、だれが、だれに勝つかの闘争であって、階級闘争以外のなにものでもなかったからである。所有制の社会主義的改造だけで階級闘争がなくなるものでないことは、これによってみても明らかであった。

所有制の社会主義改造を世界でさいしょになしとげたのはソ連であったが、そのソ連では所有制の社会主義的改造

がなしとげられたとき、これで階級対立は一掃されたと考えられた。悪戦苦闘の末に農業の集団化がようやくのことで完了したとき、スターリンはよろこびのあまり、有頂天になって、ソ連では搾取階級は絶滅されたと叫び、ソ連には「もはや相互に敵対する階級は存在せず」、「階級闘争は存在しない」と宣言した。一九三六年のスターリン憲法はこのような認識を基礎にしてつくられたものであったが、ソ連における階級闘争が一片の宣言や憲法の改正で消えてなくなるものでないことは明らかであった。一九三七年になると、その前年搾取階級の絶滅を宣言したばかりのスターリンは、三月三日のソ連共産党中央委員会総会で、「階級闘争の激化」を訴えた。これはまことにどうもつじつまのあわぬ話であった。敵対階級のなくなった社会で階級闘争が激化する筈もなかったからである。スターリンはつじつまのあわなくなったこの議論につじつまをあわせるために、国際帝国主義の破壊活動という外部的要因をもち出してきて、それを説明しようと試みた。農業集団化の成功によってトロッキー、ジノヴィエフ派、その他の反革命分子は、ソ連国内では完全にかれらの階級的基盤を失い、たよるべきものがなくなったので、こんどは国外にかれらの後援者を求め、国際帝国主義と提携して、そのスパイになり下り、国際帝国主義の援助をうけて破壊工作にのりだした。そのために激化する筈のない階級闘争がソ連の国内で激化したという説明が、すなわちそれであった。国際帝国主義はたしかに社会主義社会のなかに階級闘争を存続させる一つの条件ではあったが、それだけが唯一の条件ではなかった。中国自身の経験からしても、それ以外にも階級闘争を存続させる条件はいろいろあったからである。

社会主義社会には、打倒されはしたが、機会があればもう一度かれらの「天国」をとり戻したいと考えている旧地主や旧ブルジョアジーがあった。かれらは社会主義建設については、いつもこれを白眼視していたので、それが一寸でもうまく行かないことがあったり、またそのために何か不便なことがおこったりすると、針小棒大にそれを周囲のものに宣伝し、資本主義のよかった点や便利であった点をそれに対比させて、資本主義に対する人々の郷愁を煽っ

た。

また生産手段が社会化されたといっても、公私共営企業では旧ブルジョアジーはまだ固定利子をもらっていたし、資本主義の残滓が完全に一掃されたわけではなかった。人民公社においても、社員達はかれらの自留地や家畜、家禽、小農具、小工具をもつことを許されていた。固定利子は搾取の存続を意味したし、小商品生産はブルジョアジーを生みだすもとであった。また公私共営企業にしても人民公社にしても、経営のいいものと、わるいものとでは、そこで働く人達の収入の上に大きな開きがあったし、同じことは、国営企業に対してその成績のよしあしに応じてあたえられる奨励金の多寡によってもおこった。そこにブルジョア的な単位本位主義の生まれてくる根拠があり、それを推進するブルジョア分子の生まれてくる基盤があった。社会主義社会にはこのように、打倒された旧ブルジョアジーのほかに、社会主義社会の体内から生み出される新ブルジョア分子がいた。

周囲にこれらの新旧ブルジョア分子がいると、労働者階級や政府職員の間からも、その影響をうけて、堕落変質するものがあらわれてきた。このほか旧ブルジョアジーや旧地主がながい間かかってつくりあげた古い習慣や古い思想、古い風俗も、労働者農民や政府職員の間に、無視することのできない大きな影響力をもっていた。

すべてこれらの条件が、国際帝国主義の存在と相俟って、社会主義社会に階級を存続させ、階級闘争を存続させるのであった。もとより社会主義社会においては、階級が存続し、階級闘争が存続するといっても、その形態が資本主義時代のそれと同じでないことはいうまでもないことであった。

ところが、ソ連ではスターリンの死後、理論がこのような方向に発展させられないで、搾取階級絶滅宣言の理論がそのまま踏襲され、スターリンの階級闘争激化論の方が逆に、かれの被害妄想の産物として斥けられた。スターリンが病的敏感さで感じとった社会主義社会の階級闘争を、アッサリ否定してしまったわけである。そしてそのような

考えの上にかれらの「全人民の国家、全人民の党」の理論を発展させた。しかし、これは社会主義建設の問題をめぐって、右翼日和見主義ないし修正主義との激しい闘争をくりひろげてきた毛沢東派の眼からみれば、中国の現実に合致しない理論であり、実践的にも支持しがたい理論であった。

三　中国における新理論の登場

一九六〇年代に入ると、中国の現実はもはやソ連からの借りものの理論では、どうにもならないところまできていた。六〇年代に入るとともに、中国においてそれまでおこなわれていた社会主義社会に関する理論を、中国の現実に照らしてもう一度再検討しようとする気運が出てきたのは、そのためであった。それは別のいい方をすれば、右翼日和見主義ないし修正主義に対する闘争という毛沢東派の実践的必要にもとずいて要請された課題であったともいえる。それだけに新に形成される理論は、こうした要請に答えるものでなければならなかった。

社会主義社会にも階級闘争があることについて、人々の注意を喚起したさいしょの文献は、一九五七年二月の毛沢東の「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」であったが、このような考えは、人民公社の整頓のために開かれた一九五八年一二月一〇日の中共武漢会議「人民公社の若干の問題について」のなかにも、もられていた。これらの文献はいずれも、新理論形成の基礎となるものであったが、こうした基礎の上に立って、その理論をさらに発展させたものに、呉璉の論文、「社会主義社会の過渡的性質」（「経済研究」一九六〇年第五号）と陶鋳の論文、「過渡期の法則の問題についての試論」（「人民日報」一九六〇年八月五日号）があった。これらはいずれも反右派闘争や反右翼日和見主義闘争の経験をふんまえてかかれていただけに、直截に時代の要求に答えるものをもつていた。

毛沢東派から「右翼日和見主義」、すなわち「修正主義」と非難された人たちに共通していた態度は、これらの人

々が、社会主義社会を共産主義社会に移行させるためには、その前にまず社会主義社会自身を安定させ、強化する必要があるとしていた点にあった。三本の赤旗（総路線、大躍進、人民公社）がこれからの人達によって非難されたのも、それが社会主義社会に不安をもたらし、社会主義社会を弱化するおそれがあると考えられたからであった。これらに対して、呉璉はそのような考えはただ社会主義社会から共産主義社会への移行を阻害するだけであると批判した。呉璉がかれの論文「社会主義社会の過渡的性質」のなかで展開した論旨というのは、こうであった—

社会主義社会は共産主義社会の一段階であり、したがってその本質は共産主義的である。しかし、社会主義社会は共産主義社会の低い段階であるから、そこにはまだ旧社会の名残りをとどめている。

社会主義社会の共産主義的性質は、次の諸点にあらわれている—

一、生産手段の私有が廃止され、それらがすべて社会の共有となっていること

二、労働過程において人間の人間による搾取が撤廃され、工業と農業、都市と農村、頭脳労働と肉体労働との間の敵対関係がなくなっていること

三、分配の面では、社会の生産物がすべて勤労者の所有となり、勤労者の共同の利益をもとにして、社会によって統一的に分配されていること

これに対して、社会主義社会のなかにある旧社会の名残りと思われるものは、次のような形をとって残っている—

一、同じく社会主義社会といってもその発展段階によって、すべての生産手段が全人民的に所有されている社会主義社会と、生産手段が一部全人民的に、一部集団的に所有されている社会主義社会とがあるが、いずれの場合にもそこにはまだブルジョア的権利の名残りが残っている。国営企業においても、奨励制度がとられ、利潤の一部

がその利潤をあげた企業の職員労働者の集団や個人の福利に当てられているかぎり、それは全人民的所有制の経済といっても、なおブルジョア的権利が残っているといえる。全人民的所有制の経済においてもこの通りであるから、集団的所有の場合においてはなおさらのことである。集団的所有制というのは、個人的所有制から全人民的所有制への過渡的な所有形態であるから、そこにはブルジョア的権利の名残りは全人民的所有制の場合よりも、もっと色濃くあらわれている。そこでは集団の構成員は、まだ自留地や少数の家畜、家禽、小農具、小工具副業に対する個人の権利をみとめられているからである。

二、労働過程において人間の人間による搾取はなくなり、工業と農業、都市と農村、頭脳労働と肉体労働の敵対関係は終りをつげているが、共産主義的な平等関係はまだ実現されていない。したがって、工業と農業、都市と農村、頭脳労働と肉体労働との間には依然として差異がある。

三、分配の面では、社会の生産物が勤労者の所有となり、勤労者の共同の利益をもとに、社会によって統一的に分配されるが、その分配はまだ各人の欲望にもとずいておこなわれるのではなく、勤労者の提供する労働の質と量とに応じておこなわれる。この点ではやはりまだ等価交換の原則を体現しており、ブルジョア的権利を残しているといえる。等価交換というのは、商品の所有者が、商品所有者としての権利の平等を基礎にして、相互に交換をおこなうことをいうのであって、それはブルジョア的な権利関係以外のなにものでもないからである。

では、社会主義社会は右にのべたような共産主義的な要素とブルジョア的権利の名残りとだけから成っていて、第三の要素はないのであろうか？　共産主義的でもなければ、ブルジョア的権利の名残りでもなく、社会主義社会特有の要素というものはないのであろうか？　そういうものはない。人によっては、労働に応ずる分配を社会主義社会特有の要素と考える人もあるが、これも仔細に点検してみると、社会主義社会特有の要素とすることはできない。労働に応

ずる分配といっても、勤労者達はかれらの生産物を「働いただけそっくり」受けとるわけではない。かれらの生産物の一部は控除されて、社会全体のため、ないしはかれらの属する集団のために使われる。個人の消費のために分配されるのは、勤労者達の生産物のなかから社会全体ないし集団のために分配される分を控除した残りである。これを個人に分配するときは、提供された労働に「正比例」して、分配がおこなわれる。多く働く人には多く、少なく働く人には少なく、分配がおこなわれることが、すなわちそれであった。

このうち社会全体のため、ないし集団のためにおこなわれる分配は、社会主義的分配のなかの共産主義的要素であるということができる。これに対して個人の消費のためにおこなわれる分配は、前にのべたような等価交換の原則を体現しており、ブルジョア的権利の名残りであるといえる。一部の人々は、これをもって「社会主義社会特有の要素」といっているが、それは正しくない。第一労働に応ずる分配を社会主義社会の分配における共産主義的要素と切りはなして考えること自体がおかしい。社会主義的分配における社会に対する分配と個人に対する分配の比率は、なにも固定したものではないのである。社会の必要のために控除される部分と個人に分配される部分との比率は、時期を異にするにしたがって、また集団を異にするにしたがって、異ってよい。社会主義社会の分配は、一面においてはブルジョア的権利の残存を肯定している。労働に応ずる分配を基本的に保持するという条件のもとでの労働の量と報酬の量との比例は、状況に応じて変えてもよい。高度に発展した社会主義社会では、収入の差を縮少し、労働に応ずる分配によってもたらされる不平等を縮少することができる。発展段階の低い社会主義社会ではそれはやれない。それをやると生産力の発展が阻害されるからである。

社会主義社会には、労働に応ずる分配と並行して、必要に応ずる分配の萌芽形態ともいうべき供給制がある。供給制というのは、人民公社の初期に社員の食費や医療費、結婚費、学費などをただにしたことをいうのである。が、それ

は明らかにブルジョア的権利のワクを越えるものであり、社会主義的分配における共産主義的要素であるということができる。労働に応ずる分配と供給制による分配との比率をどうするかは、社会主義社会の発展状況や社会主義社会のおかれている状況によって異る。

こういう風に考えてみると、社会主義的分配における共産主義的要素とブルジョア的権利の名残りとの関係を、なにか動きのとれない固定的なものとみたり、「労働に応ずる分配」をなにか神聖不可侵の原則であるかのごとく考えたりすることは間違いであることがわかる。

一部の人は、社会主義社会を資本主義社会と共産主義社会との間にある、長期にわたる凝固した独立の社会経済構成体とみなしているが、このような考えも正しくない。社会主義社会はあくまでも共産主義社会の低い段階であって、共産主義的要素が旧社会の名残りよりも主導的地位をしめている社会である。そこにはこの社会のなかの共産主義的要素を絶えず拡大し、旧社会の名残りを絶えずとり除いて行こうとするプロレタリア的勢力がある半面、共産主義的要素の拡大をできるだけ喰いとめ、それをとり除き旧社会の名残りをなるべく保存し、拡大しようとするブルジョア的勢力があり、これら二つの勢力の間には、絶えず階級闘争がおこなわれる。二つの勢力の間の闘争はプロレタリア的勢力がプロレタリアート独裁という強力な後楯をもっていることによって、通常の場合はプロレタリア的勢力にとって有利に進行するが、党や国家、企業の指導権を握っている幹部が腐敗、堕落し、退化変質すると、形成が逆転し、ブルジョア的勢力にとって有利になることもある。したがって社会主義社会を共産主義社会に移行させようとするならば、社会主義社会を資本主義社会と共産主義社会の間に介在する独立の社会経済構成体とみなし、二つの社会主義的共有制（全人民的所有制と集団的所有制）の並存と労働に応ずる分配に満足し、「社会主義的秩序」の強化を要求し、ブルジョア的権利の名残りを肯定し、美化するものと、徹底的に闘争しなければならぬ。

共産主義への発展という見地からすれば、いつの日か当然に除去さるべきブルジョア的権利の名残りまでも含めて、社会主義社会を全体として強化するなどというのは、ナンセンスである。それは革命の停頓を求めること以外のなにものでないからである。社会主義建設は、抽象的、包括的に社会主義的生産関係――その中には共産主義的要素もあり、旧社会の名残りもある―を発展させることではない。それは共産主義的要素を拡大し、旧社会の名残りをとりのぞくことであり、共産主義への移行を積極的に、立派に準備することである。もっともこういったからといって、ブルジョア的権利の利用を即刻やめるべきだというのではない。社会主義社会は共産主義社会に比べると、まだ生産力の低い社会であるから、そこにおいてブルジョア的権利を適当に利用することは必要である。しかし、それを物神化してはならない。それはやがていつかは廃棄さるべき「必要的な害悪」にすぎないからである。肝要なことは拡大すべきものと、縮少すべきものとを、ハッキリ識別した上で、利用すべきものは利用するという態度をとることである。

一部の人々は、社会主義社会を共産主義的要素と資本主義の名残りという二つの矛盾の対立面の統一と闘争という観点から捉えず、社会主義社会を矛盾も、闘争もなく、量的変化があるだけで、質的変化のない社会として捉えている。これらの人々には、何を拡大し、何を縮少すべきかという観点がないから、目先の経済活動や技術活動にその注意を奪われ、眼前の個人的利益に執着し、いつの間にか右翼保守思想のとりこになる。しかし、社会主義社会はただ量的変化があるだけの社会ではない。そこでは生産力の量的増大や人民の政治的、思想的、道徳的自覚の向上にともない、旧い習慣や旧い伝統、旧い思想を打破し、人と人との関係を絶えず改善し、社会のなかに、次々と新しい気風を打ち立て、局部的な質的変化をおこし、新しい共産主義的要素が旧社会の成分、要素、痕跡をしだいに克服して、共産主義社会への移行を準備する段階であり、その意味においてそれは過渡的な社会である。社会主義社会から共産主義社会への飛躍は、自然界にみられる突然変異のように一瞬にしてやってくるものではなく、それは長期間にわた

って、局部的な質的変化を、積みかさね、積みかさねしてゆくことの綜合的な結果としておこるのである。こうした局部的な質的変化の積みかさねを意識的につくり出す過程が連続革命である。この連続革命によって社会主義社会がその体内に新しい質的要素の蓄積をふやし、古い質的要素の衰亡を促進することによって、はじめて共産主義社会への飛躍が準備されるのである。かって中国では新民主主義社会から社会主義社会に移行する時期を「過渡期」とよんだが、社会主義社会から共産主義社会に移行する時期もまた「過渡期」である。一言にしていえば資本主義から共産主義に至る全歴史的時期が過渡期である。そしてそこにおける連続革命の勝利と新民主主義から社会主義へ、社会主義から共産主義へと、革命段階の発展を保証するものがプロレタリアート独裁である。

しかるに、右翼日和見主義すなわち修正主義は、社会主義社会をこのようなものとしてとらえず、それをコチコチの、凝固した、不変のものとしてとらえ、それを強化しようとすることによって、実は旧社会の名残りを安定させ、資本主義の復活を助けている。したがってこれを撃破することなしには、共産主義への発展を期待することはできない。

以上が呉璉の理論の要旨であったが、文化大革命の勃発後中国共産党の宣伝部長に抜てきされ、後に修正主義者として追放された陶鋳もまたこのころまでは、これと同じ考え方の上に立って、かれの理論を展開した。かれもまた社会主義社会を過渡的性質の社会とみ、それを独立の社会経済構成体として、定形化することに反対した。そこでは成長しつつある共産主義と死滅しつつある資本主義との闘いが、その存在の全期間にわたってつづき、前者が後者をしだいに圧倒してゆくことによって、社会主義から共産主義への発展が保証されるとした。社会主義社会は共産主義社会よりも生産力の低い社会であるから、そこにおける分配は、労働に応ずる分配でなければならないが、労働に応ずる分配はあくまでもブルジョア的権利の名残りであるから、それを唯一絶対のものとして物神化してはいけない。経

済活動については、ただ経済法則や独立採算を考えるだけでは駄目であって、政治的計算を常に考えのなかにいれておかなければならないとした。

四　埋めがたくなったソ連理論との溝

これらの論文がかかれたのはいずれも一九六〇年であり、当時中ソ関係はすでに少しづつ悪化しつつあったとはいえ、まだ決定的な破局を迎えるところまではいっていなかった。そのためにかれらの論文も直接ソ連の理論を批判するという形をとっていなかったが、それにもかかわらず、その内容は明らかにソ連の理論と対立するものであった。ソ連の理論では、これらの人々の理論とは反対に、社会主義は独立の生産様式として、また社会主義社会は独立の社会経済構成体としてとらえられ、労働に応ずる分配は社会主義社会特有の経済法則とされていたからである。そこでは資本主義から社会主義に至る時期と、社会主義から共産主義に至る時期がハッキリ区別され、前の時期は過渡期とよばれて、そこには階級と階級闘争があるからプロレタリアート独裁が必要であるが、後の時期には階級と階級闘争がなくなるので、プロレタリアート独裁は不必要になるとされた。それにもう一つ、ソ連の理論が呉璡や陶鋳などの理論とちがう点は、政治よりも経済を重視し、生産力の発展に大きな期待をかけている点であった。生産力を高めて行きさえすれば、他の問題は自ら解決するといった式の楽観論をもっていたことが、すなわちそれであった。思想革命であるとか、人間改造といったものは、生産力が発展すれば、自らその結果として達成されると考えられていた。工業生産力が高まってトラクターやコンバインがどしどし農村に供給され、農民がそれらの農業機械を使って農業を営むようになれば、かれらの頭も自然変ってくる。コルホーズ員の自留地や副業などにしてもコルホーズの生産力が高まって、コルホーズ員に対する分配がふえれば、そんなものは不必要になるから、コルホーズ員自身がその

返還を望むようになる。生産力が高まれば、学校、図書館、その他の文化施設もふやすことができるし、労働時間を短縮してそれらを利用する時間的余裕をつくりだすこともできるから、人々の文化水準も自ら高まり、その考え方も自ら変ってくる。そこで肝要なことは生産力を高めることであり、そのために物質的刺戟を活用することが必要なら、大いにそれを活用することである。資本効率をあげるために生産資金に「利子」をつけることが必要なら、それをつけることもよかろうし、企業の成績を評価するのに「利潤」を用いる必要があれば、それもよかろう。収入の格差が拡大されても、それによって生産力の発展がもたらされれば、それでよいではないかというのであった。これがソ連の生産力第一主義の考え方であったが、それは中国に新たにおこってきた理論と到底両立しうるものではなかった。中国の新しい理論では、経済に対する政治の統師が強調され、生産力の発展が、人間の絶えざる思想的、道徳的改造や人間関係の調整によって裏打ちされなければ、社会主義から共産主義への発展は不可能であるとされていたからである。

中国に抬頭しつつあったこのような新しい理論とソ連の理論との間の溝は一九六一年ソ連共産党第二二回大会において「全人民の国家」の理論が打ち出されるにおよんで、もはや埋めがたいものとなった。

五　理論的転回点となった中共第八期中央委十中全会

一九六二年九月中国では、中国共産党の第八期中央委員会第一〇回全体会議（十中全会）が開かれたが、そこではそれまでにすでに中国にあらわれつつあった新しい理論が検討され、社会主義社会の階級闘争に関する理論が、党の公式の理論として採択された。それとともに中国はソ連の理論とハッキリ訣別した。十中全会のコミュニケはその訣別宣言ともいうべきものであったが、その中には次のようにのべられていた―

「第八期中央委員会第一〇回全体会議は、プロレタリア革命とプロレタリア独裁の全歴史的時期には、また、資本主義から共産主義への移行の全歴史的時期には、プロレタリアートとブルジョアジーとのあいだの階級闘争、社会主義と資本主義との二つの道の闘争が存在することを指摘した。打倒された反動支配階級は滅亡に甘んぜず、かれらはつねに復活を企んでいる。同時に、社会にはブルジョアジーの影響と旧社会の習慣の力が残っており、一部小生産者の自然発生的な資本主義的傾向が存在している。したがって社会主義的改造をうけていない若干の人々がまだ人民のなかにいる。かれらは、数は少なく、数パーセントを占めるにすぎないが、機会さえあれば社会主義の道を離れて資本主義の道を歩もうとする。この状況のもとでは階級闘争はさけられない。これはマルクス・レーニン主義が早くから明らかにしている歴史的法則であり、われわれが決して忘れてはならないものである。」(六)

しかし、これはソ連の理論に対する訣別であると同時に、中国共産党自身の過去の理論との訣別でもあった。新たに定式化された党の公式理論によれば、社会主義社会には階級がないとか、社会主義と資本主義の闘争はもう勝負がついたとか、階級闘争がつづくのは所有制の社会主義的改造が完了するまでとか、ソ連にはもう階級がなくなったとかいった式の中共自身の過去の理論は、すべて誤りだということになるからであった。また一九五八年ごろ一時中共を風靡した「中国において共産主義社会が実現するのも、そう遠い将来のことではない」といった式の考えも、正しいとはいえなかった。公式の理論によれば、「社会主義社会はひじょうに長い歴史的段階」であり、「社会主義と資本主義のあいだのたれがたれに勝つかの闘争は」、「数十年では駄目であって、百年から数百年の時間をさかなければ、成功できるものではない」とされていたからである。

（一）千家駒、馮和法著、寺崎裕義訳「過渡期の中国社会経済制度」三一書房二四頁

（二）同上、二五頁
（三）外文出版社版「第八回全国代表大会に対する中国共産党中央委員会の政治報告」三三頁
（四）同上、七九頁
（五）「ふたたびプロレタリアート独裁の歴史的経験について」（人民中国、一九五七年第三号付録一三頁）
（六）中島嶺雄編著、「中国文化大革命」六七頁